

インド・オリッサ州の貝葉写本の 特徴について

シヨバ・ラニ・ダシュ

はじめに

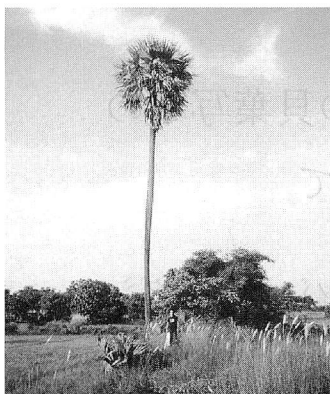
インド東部・オリッサ州（図1と2参照）の文献や伝統芸術の研究の中で、それらに關係する貝葉写本についての研究が近時最も注目されてきている。貝葉とは「^{はいたろう}貝多羅葉」（ターラ樹の葉）の略語である。これはサンスクリット語の「*pattra*」つまり「葉」の音写を起源とする。オリッサではターラ（*tāla*）と呼ばれる椰子の一種の大きな扇子のような葉から作られるものである（図3と4参照）。本論ではオリッサ地方の貝葉写本の歴史、作成方法、種類、特徴、保存方法、そして現状について述べる。



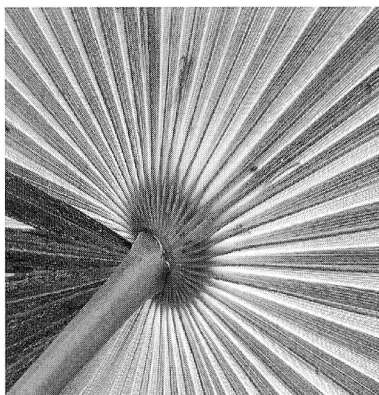
第1図 インドの中でオリッサ州の位置



第2図 オリッサ州全体図



第3図 ターラ樹



第4図 ターラ樹の葉

歴 史

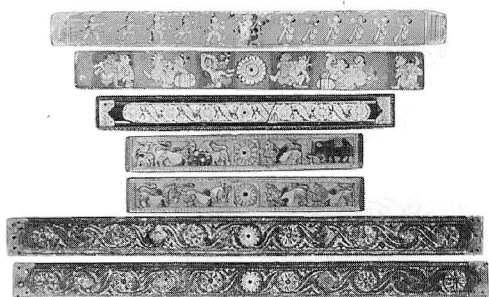
オリッサの貝葉写本の起源は、正確には知られていないが、6世紀頃にはすでにその伝統が成立していたことが様々な碑銘から知られている。¹⁾7世紀の Shailodbhaba 王朝期の碑文からも当時貝葉を用いて碑文が記されていたことがわかる。そして7世紀に建立された Muktes'var 寺院も貝葉写本の歴史を物語る。その時から現在まで、歴史の様々な浮沈を通して貝葉写本の伝統は継続している。

特 徴

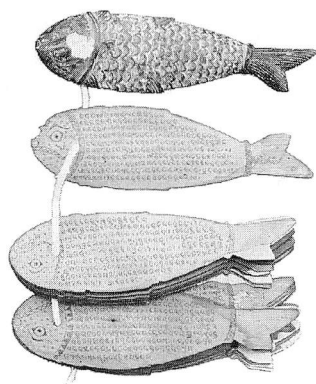
オリッサ地方の貝葉写本にはいくつかの顕著な特徴が見られる。通常東南アジアに見られる貝葉は長い場合は左右に二つの綴穴があり、短い場合は中心に一つの綴穴がある。しかし、オリッサ地方の貝葉写本は長さに関係なく中心に一つだけ綴穴があるのが一般的である。

1) Rath, J., "Palm-Leaf Manuscripts: The Proud Possessions of Orissa", *Orissa Review*, November, 2005, pp. 37~38.

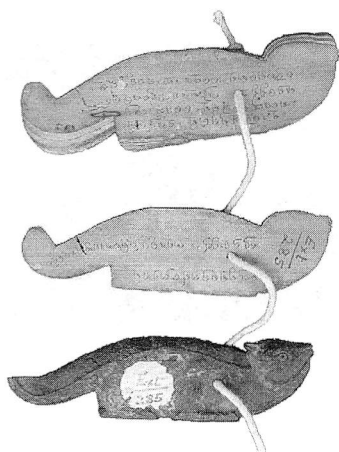
Pani, S., *Illustrated Palmleaf Manuscripts of Orissa*, Orissa State Museum, Bhubaneswar, 1984, p. 1.



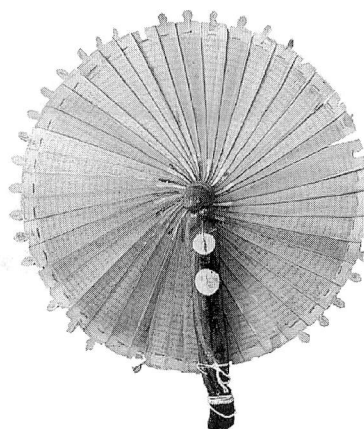
第5図 貝葉写本の木製カバー



第6図 魚形の貝葉写本



第7図 鼠形貝葉写本



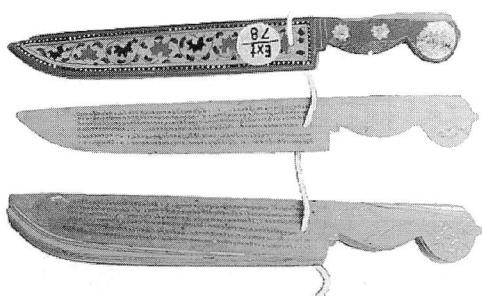
第8図 扇形貝葉写本

そして、各貝葉の表と裏にカバー（夾板）が付されている。オリッサ地方では竹のカバーと木製のカバーの両方が見られるが、長期保存のために竹のカバーを木製のものに入れ替えることも珍しくない。これらのカバーの上にはとても美しい絵が描れたり、細かいレリーフが掘られたりする（図5参照）。

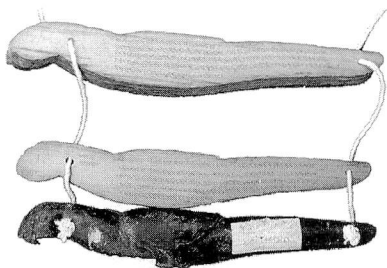
更に、これらの貝葉の形にも大きな特徴がある。一般的に見られる長方形の貝葉写本だけではなく、様々な形のものが存在している。オリッサの州立博物



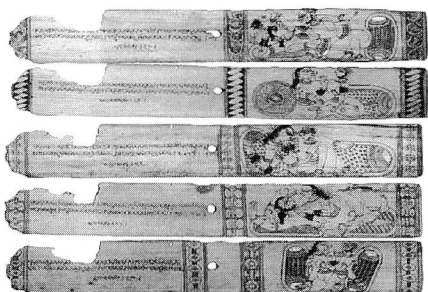
第9図 数珠形貝葉写本



第10図 短剣形貝葉写本



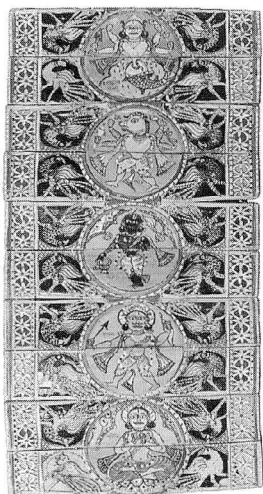
第11図 鸚鵡形貝葉写本



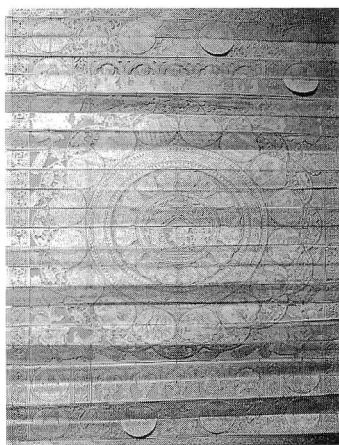
第12図 挿図入り貝葉写本

館では魚（図6参照）、鼠（図7参照）、扇（図8参照）、数珠（図9参照）、短剣（図10参照）、鸚鵡（図11参照）などの形をした貝葉写本を見ることができる。これらはオリッサ地方にしか見られない貝葉の形態であると言われる。

オリッサ地方の貝葉には文字のみを記すものだけではなく、美しい流線形の挿図・絵画などが描かれているものも数多く存在する（図12参照）。挿図・絵画は白黒や単色のみならず、自然の素材の顔料や接着剤を用いて様々な色で描かれ、その作画技法はオリッサ独自のものである（図13参照）。鉄筆で描かれた絵以外に、細かく貝葉を裁断して浮き彫り形の様々なレリーフも作られる（図14参照）。



第13図 Daśavatāra 挿図入り貝葉写本



第14図 曼荼羅形の浮き彫り絵画

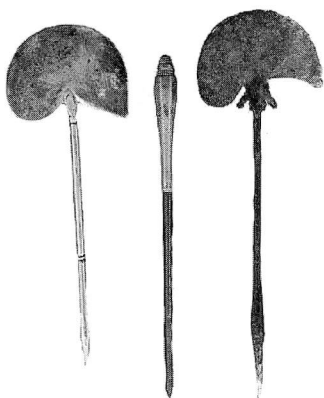
保存にはオリッサ地域に多く生育する植物を使用する。

これらの貝葉は文献学としてはいうまでもなく、伝統芸術としてもオリッサの社会や文化に大きな影響を与えている貴重な資料である。

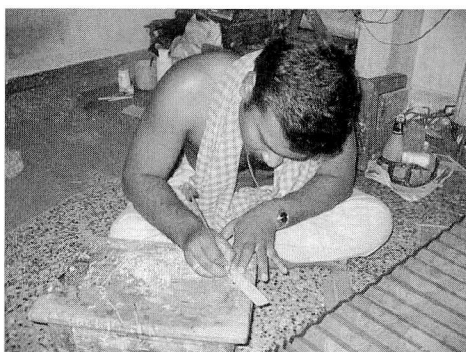
作製方法

貝葉の上に、文字または絵などをエッチングするためには手間のかかる準備が必要である。その作製方法もまた、他地域に見られないオリッサの気候や植物の品質をよく研究した上での独自の作業である。その作製は以下の順番で行われる。

1. 貝葉作りは相応しいターラ樹を探し出すことから始まる。ターラ樹にはオスとメスの樹があり、その中のオスの樹のみが貝葉のために使用される。
2. 先ず、ターラ樹の生の葉を適切な長さに切る。
3. それを半乾き程度に日乾しする。
4. 完全に乾いてしまう前に、それを沼池の泥の中に約一週間埋めて置く。
5. そこから取り出して、水洗いしてから約3日間もう一度日乾しする。

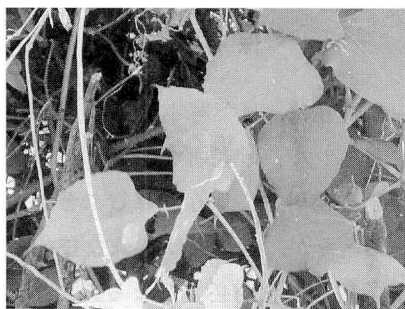


第15図 鉄筆

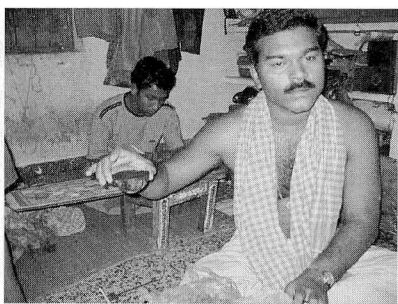


第16図 鉄筆で描いている作者
Brajeshwan Pattraik 氏

6. そして、約3日間風で乾すか又は陰干しする。(季節によっては二度目の日乾しがなく、約一週間の陰干しのみになる。)
7. 防虫の強化と葉を堅くするために、わらで作った^{ふこ}畚の中にそのまま粃や米と一緒に一週間ほど入れて置く。
8. そこから取り出して、葉の両面をナイフで磨く。
9. それらをととても柔らかい布で同一方向に拭く。
10. これらの準備作業が終わった段階で、葉の上に文字や絵をエッチングするために必要な長さに裁断する。
11. 写本として用いられる場合、先ず中心（場合によって左右）に紐通し穴を作る必要がある。そのために、鉄の棒を火で焼いてその熱い棒で丸い形の綴穴を開ける。
12. 挿図・絵画の場合、必要に応じて数枚の葉を横で紐で結んで、四角の囲いや長方形のベースを作ってから絵を描く作業に入る。
13. *Lekhani*と言われる鉄筆を使用して、文字や絵を刻む（図15参照）。一般の写本や挿図入りの写本の場合両面に文字を刻むが、絵の場合表面のみが使用される。訂正は全くできないので、この時に作業者は高い集中力が必要である（図16参照）。



第17図 シンバの葉



第18図 墨として使用される液体

14. このままでは、葉の上に刻んだ文字が読みづらいので、刻んだ文字をはっきりと読めるようにある工夫を行う。先ず、ココナツの殻を焼いた炭の粉や煤にシンバ (*shimba*) と呼ばれる一種の豆の葉 (図17参照) の汁を混ぜ込んだ濃厚な液体状のものを作る (図18参照)。



第19図 エッチングされた文字や絵の上に塗られている黒い液体

次に、それを綿や柔らかい布や筆を使用して一方向に葉の上に塗る (図19参照)。そうすることで、刻んだ文字の中に黒い液体が入って、文字を黒くはっきり浮かび上がらせる。絵の場合、様々な植物の汁や石から作られる天然の色を使用する。(尚、シンバの葉は冬しか入手できないので、冬以外の季節にはゴマ油が代用される。)

15. 最後に、一枚一枚の葉の綴穴に紐を通して束状態にし、最初と最後に竹又は木製のカバー (夾板) をつける。絵の場合、折り畳み形式になっているので、そのまま折り畳んで最初と最後の貝葉に付されている飾りのような紐で結ぶ。



第20図 オリッサ州立博物館に置かれている赤色の綿の布で包んだ貝葉写本

保存方法

現在は、貝葉写本の重要性が注目されて、研究所などでは最新技術を使用して保存されることもある。だが、それには特殊な技能と多額の資金が必要となるので、未だにいくつかの伝統的な方法での保存法が一般的には用いられている。

以下その中のいくつかを紹介する。

1. インドの家庭治療や料理に欠かせないターメリック（ウコン）は、貝葉写本の保存にも大きな役割を果たす。ターメリックには抗菌性、殺菌性と虫を撃退する力がある。故に、ターメリックで染めた黄色の綿の布で貝葉を包んで置く。
2. 赤色そのものは虫除けの力を持っていると信じられているので、赤色の綿の布で包んで置くことも多く見られる（図20参照）。ターメリックに少しライムを混ぜることによって赤色で染めた綿の布にも包むこともよくある。そして、綿の布で包むことによって、埃などから貝葉が守られると同時に風通を良くすることもできる。このようにして、赤や黄色の綿の布で貝葉を包んでおくことが習慣となっている。
3. オリッサ地方の習慣の一つとして、毎年10月ごろに行われるドゥルガー女神の祭りの日に貝葉を外に出して、きれいに拭いてまたもとに戻す。そうすることで日光と空気に貝葉をさらし虫や害物を除く。
4. 時々新しいターラ樹の葉のエキスを古い貝葉の上に塗って、古い貝葉に命を与える。そうすることで、乾燥しすぎてわれやすくなった貝葉は少し柔らかくなる。
5. 柅檀は強い香りを持つため、虫除けのためにその粉も多く使われる。
6. 樟脳を使用することでカビ除けや昆虫を撃退する。

現 状 況

最近の情報によると、現在オリッサ州立博物館に3万7千本余りの貝葉写本が存在し、インド最大の数を占めると言われている（図20参照）。これらの貝葉写本は下記の25の広範囲に及ぶ項目によって分類されている。

1. ヴェーダ, 2. タントラ, 3. 占星学／

天文学, 4. 法典, 5. アーユルヴェーダ,

6. 数学, 7. 芸術学, 8. 音楽, 9. 辞

典, 10. 文法, 11. 梵文プラーナ, 12. 梵文詩, 13. 修辞, 14. ベンガル文

字の梵文作品, 15. ベンガル語の作品, 16. デーヴァナーガリー文字の作品,

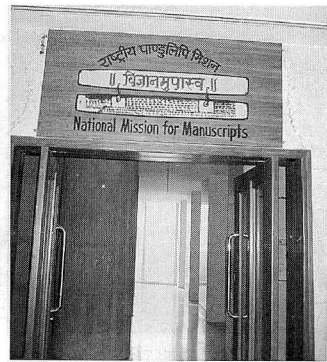
17. オリヤー語のプラーナ, 18. オリヤー語の詩, 19. オリヤー語の散文,

20. オリヤー語の歴史的文学, 21. アラビア語の写本, 22. 哲学, 23. テル

グ語の写本, 24. 複写写本, 25. 図解・挿絵入りの写本。²⁾

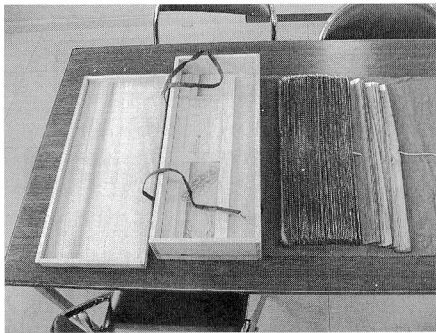
これら以外にも、数多くの貝葉写本がオリッサの大学図書館や個人蔵としていたるところに散在している。

また、インド中央政府の文化省の National Mission for Manuscript という広大なプロジェクト（図21参照）や Indian National Trust for Art and Cultural Heritage (INTACH) の Indian Council of Conservation Institute (ICCI) という文化保存修復組織などの協力で現在数多くの貝葉写本の保存修復作業が進んでいる。National Mission for Manuscript プロジェクトの一部として巨大なデータベースが構築されている。近日中に完成する予定である。このデータベースでは、インド各地に散在する貝葉写本の情報が収録されている。その中、大部分をオリッサの貝葉写本が占める。



第 21 図 National Mission for Manuscripts 建物の入口

2) Patel, C. B., "Palmleaf Manuscript Legacy of Orissa and National Mission for Manuscripts", *Orissa Review*, October, 2004, p. 61.



第22図 「津島貝葉」とその専用の桐箱

更に、オリッサ州立博物館のスタッフやボランティア団体などが遠く離れた村まで足を運び、個人蔵や村の所有として存在する写本を博物館のために購入したり、個人蔵として所有し続けたい人に貝葉写本の保存方法や貝葉写本そのものの大切さを教えたりして、オリッサ地方の貝葉写本の遺産を守

ろうと努力している。

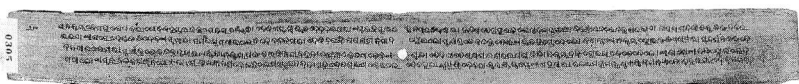
貝葉は、写本としては現在作製されていないが、挿図・絵画の形で現在も数多く作られ、芸術的に高く評価されている。そして、人の生涯を描写するジャータカと呼ばれる星占いとしてオリッサの各家に欠かせないものとして大切にされている。

おわりに

約400年前に書かれたオリッサ地方の貝葉写本が、日本の愛媛県津島町に江戸時代中期（18世紀）ごろから伝えられていると言われている。叙事詩『マハーバーラタ』のオリヤー版であるこの貝葉写本は現在「津島貝葉」（図22と23参照）と名付けられ、ローマ字校訂と和訳の作業が続けられている³⁾。この貝葉写本の存在は、将来、日本とインド（特にオリッサ州）との関係を明らかにする重要な資料となるであろう。

オリヤー語は Pūrva Māgadhī 語に由来し、東インドアーリヤ語族 (Eastern Indo-Aryan language family) に属する。オリヤー文字の書体 (ଓଡ଼ିଆ) は、Brahmi 文字に属する Kalinga 文字より発展したものである。オリヤー文字が上記のような丸い書体を持っているのは貝葉写本の影響であると考えられてい

3) 拙論「日本で発見されたオリヤー語の『マハーバーラタ』について」『印度學佛教學研究』第54巻，第2号，日本印度学仏教学会，2006年3月，241～244頁。



第23図 「津島貝葉」とその専用の桐箱

る。なぜなら、横棒のある書体の使用は貝葉に損傷を与えるからである。オリーヤ文字はこのような丸い書体を持っているからこそ貝葉写本に一番適しているであろう。

現在、オリッサ地方の貝葉写本はインド国内及び海外の国々においても大きな注目を浴びている。この伝統芸術は時代の流れのなかで失われることなく、現代社会に生き生きと残っている。そして、ターラ樹の一枚一枚の乾いた葉が、インド国内及び海外にオリッサ地方の伝統、文化、芸術と数々の文献とを紹介し、オリッサ地方の誇りを守っているのである。

付記：

- ① 本稿内容は、特別に指摘をしない限り、2001年3月24日～31日、2006年2月15日～20日及び2007年1月7日～10日の三回の調査結果により得た情報に基づいている。
- ② オリッサ州立博物館は図5～13及び15、愛媛県宇和島市教育委員会 津島支所教育課は図22と23を提供してくださったことを心よりお礼を申し上げます。